

食・自然エネルギー・ケアでつながる 新たな生活基盤の可能性を探る

日本の資本主義、そして農業は、
どのような方向に進むべきか

川井真（以下、川井）…これから後半のディスカッションに入りたいと思います。ディスカッションでは、中沢新一先生に参加していただきます。著名な先生でいらっしゃいますので皆様もご存じかと思いますが、ひとこと私からご紹介させていただきますと、〃世界に誇る日本の頭脳〃とだけ申し上げておきたいと思います。本当に広い視野から物事を何でもご存じなので、ちよつとぞつとするときもあります、研究を

深化させるために日頃からご指導いただいております。

後半のディスカッションでは、先にご報告いただいた早川富博先生、河合勝正組合長、澁澤寿一先生に加え、私どもJA共済総研からは理事長の町田勝弘が参加させていただきます。中沢先生には全体の取り仕切りをお願いし、私、川井真が進行役を務めさせていただきますと思います。

それでは、まず中沢先生から、ご挨拶を含めて開始のご発声をいただきたいと思います。

中沢新一（以下、中沢）…中沢です。よろしく

お願いします。

今回の集まりは、JA共済にとって大きな意味を持つと同時に、おそらくこれから先の日本の社会、文化をどのようにつくっていくかを考えるときに、とても大きな意味を持つ集まりではないかという気がしました。

僕は河合さんも早川さんも澁澤さんも、何回かお会いして話を伺っています。早川さんは医療を中心にして、現代が抱えている農村の問題に取り組みうとしている。河合組合長は、農業というものの現場で、現代の問題に取り組みうとしている。澁澤さんは、もう少し大きい視野というか、経済の問題、日本の資本主義の問題、そうしたものも含めたところで問題に取り組んでいる。そして今日の話を伺っていると、このお三方がなさっていることは、全体が結ばれていて、その取り組みには、一つの共通した課題が浮かび上がってきているように思います。

これから日本の農業がどのような方向に進んでいかなければいけないのか、農村をどのような方向へ変えていかなければいけないのか。

問題点もはっきりしてきたし、もっと大きく言くと、資本主義、産業というものをどのような構造に向けていかなければいけないのか、今日の話でよく見えてきたと思います。何より驚くのは、どのような方向へ向かって問題の解決

中沢 新一



を図っていけば、良い方向に開かれていくかということだが、お三方の話で、だいたい方向性が同じだということがわかりました。それは、いろいろな問題を抱えている日本の向かうべき方向性を示しているのではないかと思います。

今日、澁澤さんのお話を伺っていて、ベストセラーになっている『里山資本主義』という本の背後には、どうも『澁澤さん』がいるらしいということに気づいて、ちょっとゾクツとした。

日本の資本主義を最初に立ち上げたのが、澁澤栄一（*1）を中心とするグループでした。澁澤栄一という人は、日本の資本主義は農業をベースにし、それに産業を乗せていくという大きな構図を描いていたと思います。

それから何世代かを経て、日本の資本主義というのは、今、変な方向に進んでしまった。その変な方向へ進んでしまった資本主義のせいで、

土台になるべき農業は、ある部分はズタズタにされようとしている。大変ゆがんだかたちになりかかっている。しかし、それをどちらの方向に戻していけばよいのかということを今度は澁澤寿一さんたちが模索されていると思います。

（*1）澁澤栄一（1840—1931）実業家。第一国立銀行現みずほ銀行をはじめ多くの企業の設立・経営に関与し、日本資本主義の父といわれている。澁澤寿一氏の曾祖父にあたる。

——日本は、戻るべきはつきりとした資本主義モデルをもっている

中沢…今、世界中で資本主義が暴走を始めています。農業をベースにした「原始的蓄積」という言い方も経済学にはありますが、いちばん土台のところで価値を増やし、資本の増える運動をもとにして、そのうえに工業や商業というものを組み立てていかないと、資本主義というのは円満に動かないのです。それが今は、金融の部分が非常に肥大してしまっていて、土台の

部分を侵食し始めている。これが世界中で起こっているのです。この世界中で起こってしまっている資本主義のスタイルは、西ヨーロッパが始めてしまったことですが、その西欧のやり方を日本人も受け入れてきたわけです。

しかし、それから百数十年経ち、世界規模で方向を変えていかなければいけないときにきている。そのとき日本人は、すでにモデルを知っている。資本主義をどちらの方向へ戻していけばいいのかについて、日本ははつきりしたモデルを持っているということだと思います。くしくも「里山資本主義」という言葉が使われましたが、それは、私たちの先祖が近代産業を受け入れ、資本主義をつくろうとしたときのモデル、つまり澁澤栄一さんたちがビジョンとして描いていたものだと思います。

生活の隅々にまで問題は及んでいて、それが今日では老人介護の問題だったり、流通の問題

であったり、農村社会のつくり方の問題、そうした小さなところまで及んできています。しかし、大きな目で見たときに、どちらの方向にこの社会をつくり変えていけばよいのかという、ある程度の解答が私たちには見えています。これは日本の大変な長所だと思います。お三方の話は、この解答の図を描いてくれたと思います。実現は大変難しいことだと思いますが、その中から見えてくるビジョンを取り出してみる。これはJ A共済、あるいはJ Aにとっても非常に重要なヒントになると思いますし、日本全体が、これから我々の社会がどのような方向へ向かって行かなければいけないのか、何か一つの見取り図のようなものを見せているように思います。ですから、僕は今日の集まりは大変重要なものになると考えています。

—— 生存と信用をベースとした
社会を再構築しない限り
社会は持続しない

川井・中沢先生、ありがとうございます。ちょうど今、ひいおじいさまのお名前が出ましたが、澁澤先生、何かご意見はございますか。

澁澤寿一（以下、澁澤）…偉いひいじいさんで、私がこんなことをやっていて申しわけないのですが、先ほどの宮本常一さん（P 59 参照）のパトロンをやっていたのは澁澤敬三（*2）、これは栄一の孫にあたるのですが、ちょうど私が小学校5年くらいときに彼が亡くなりました。その亡くなる前、小学校3、4年生のときに、「じいさんがとんでもないものをこの国に持ち込んだ。このままだと、日本という国がもうボロボロになるのではないか」ということを盛んに言っていたのを覚えています。

そのときに彼が言っていた「とんでもないもの」というのは、資本主義です。もともと日本には、まず自分たちが生きていく「生存」というものがベースにあり、もう一つ「信用」というベースがありました。その「生存」というのは、まさに今、中沢先生がおっしゃったように農業の部分で、「信用」というのは、たぶん彼に言わせると『論語』に由来しますが、江戸時代からの日本人の「結」や「講」といったことを含めた一つのパブリックな価値観です。

そうした「公共」の概念のうえに経済が成り立っていたものが、あつという間に経済だけが独り歩きをしていき、お金がお金を生むシステムができた。今の、それこそビットコインの問題もそうです。ビットコインと、今の日本の財政とどこが違うのかというと、たいして変わらないとさえ思える。国債も、ひよっとしたらビットコインかもしれないというような話もあるわ

けです。そこまでは言いすぎかもしれませんが、こうしたことを考えていくと、本当に「生存」と「信用」をベースとした社会を再構築しない限り、人間の社会の持続可能性というのは、たぶんないのだろうと、最近とみに思っています。

（*2）澁澤敬三（1896—1963）財界・民俗学者、日本銀行総裁、大蔵大臣等を務めた。



澁澤 寿一

グローバル化の流れの中で、 もう一度地域に根づいた 生活を見つめ直す

川井・ビットコインという気になる話題も出ましたが、まさに通貨の問題、資本主義の問題は、これから真剣に考えていかなければならない日本の大きな問題だと思います。そのグローバル化の中で、日本がある程度の位置づけを保ちながら、そして今の生活を完全に壊すことがないように、新しい仕組みに乗り換えていくことを考えていかなければならない。このことは、私も本当に痛感しています。

先ほど中沢先生から、日本の進むべき方向性について、前半でお三方からご報告のあった内容が、ほぼ同じ方向を向いているというお話もありましたが、私もまさにそのように思っています。今もう避けることのできないグローバル

化の流れの中で、日本はもう一度、地域あるいは「まち」というものに根づいた生活を見つめ直さなければいけないと痛感しています。

そこで、先ほどの河合組合長のお話の中でも多く触れられていた「地域力」のようなものについてですが、以前、河合組合長から、「自分の地域は高齢化、認知症問題は何か怖くないんです」というお話を伺ったことがあります。なぜかという、女性部の人たちがいるからだ。それは本当に地域における足腰の強さだと思っと思っていますが、河合組合長、何かひとこと、お願いします。

—— 地域の暮らしを支え、

縁の下の力持ちとなっているのは、

やはり女性

河合勝正（以下、河合）… 私どもの地域も高齢化率が、今52・3%くらいになっているようにで

す。50%を超えると限界集落となるということ

も聞いています。私も学校卒業以来、田舎暮らしをずっと続けていますが、はたして限界集落なのかということを常々考えています。集落のきずなはけっこう強くて、むしろ都市部で暮らすよりも農村で暮らすことのほうが安らぎもありますし、人との触れ合いの温かさもあります。その意味では、大変幸せな地域ではないかと考えています。

ただし、今は暮らしを成り立たせるためには、便利をすべてお金で買わなければいけないという時代に入っています。私どもの地域でも、水道も下水も、日々の生活の電気もすべてお金で買います。お金がなければ、田舎といえども暮らしが成り立たない。そうした実情があります。が、私どもの地域にあっても、何とか外貨をうまく稼ぎながら頑張っている皆さんは相当います。

JAでいうと、今、貯金が1650億円くらいあります。よそのJAの話をして恐縮ですが、川下に4つJAがありまして、いずれも人口が38万人、18万人、10万人前後の市ですが、貯金高はあまり変わりません。ということは、私どもの地域のお年寄りは、都市部のお年寄りと比べても結構お金をためていて、田舎に暮らしながら、うまく外貨を稼いでいるということではないかと思っています。

「じいちゃん・母ちゃん農業」などと言われますが、昔から女性の力が家計を支え、暮らしを支えている。こうした部分がものすごく色濃く出ているのではないかと思っています。

高齢化や人口減少から逃げるわけにはいきません。ですから、その中でどれだけ皆さんが心の豊かさも含め、地域で楽しく暮らしているのか。そうした縁の下の力持ちとなっているのは、やはり女性だと思います。女性は考え方

が非常にフラットです。男性はすぐ上下関係や建て前にこだわりますが、女性はそうではありません。けっこう本音でものを語りますし、みんなフラットなところで話ができる。話の結論も早いです。男性の会議はいつまでもやっていきますが、女性の会議は早く終わります。そのようなことを常々感じているところです。

河合 勝正



——Iターンで東京から来た人たちを
自分たちの家族として受け入れる

中沢…僕もその女性部の会へ参加しましたが、
活気があり、一人ひとりが、ここまで言うかと
いうくらい言っている。実は、河合組合長はそ
の会ではタジタジなのです。

J A全体では上層部の構成は、女性是非常に
少ないのではないかという印象を受けます。例
えば、河合組合長のところに行っても、上層部
の人たちは男性なのです。ところが、アイデア、
意欲においては女性のほうが断然活力がある。
縁の下の力持ちどころではないと思うくらいで
した。

発想が大変自由なものには驚きました。自分た
ちの息子は、帰ってきて農業を継がないかもし
れない、それは仕方ないと言っているのです。
だったら、都会からIターンで入って来る人た

ことが、これからの日本の地域を、もう一度よ
みがえらせる大きな力の源泉になると実感しま
した。



ちを受け入れようということまで言い出す。

今まで農村の人間関係の基本をつくるのは
「家族」と「地域共同体」でしたが、そもそも「家
族」の部分が、今、日本では変質し始めている。
大家族が、核家族になったことで、家族が機能
しなくなってきた。ところが女性部の人た
ちは、機能しなくなった部分を自分たちが担お
うと言うのです。「Iターンで東京から来た人
たちを自分たちの家族として受け入れることも
できる」というくらい、大胆なことを言ってい
たのには、僕はびっくりしました。それがいろ
いろと難しいことははらんでいることは、皆さ
んもよくご承知のとおりだと思います。それで
も、この人たちは今まで農村共同体をつくって
きた原理を変えても構わないと思っているので
す。

この人たちが考えていること、この人たちの
活力というものを大きく引き出して浮上させる

——地域活性化に、40～50代の

女性が参加していれば望みがある

川井…私も一緒に訪問させていただいて、まっ
たく同感でした。そこで、女性の力というもの
に少しシフトしてお話しを続けさせていただき
ます。

早川先生がなさっている地域の医療・ケアの
活動には、J A愛知東の管轄エリアが含まれて
います。とくに設楽町や東栄町は大変な地域で
すが、ここにも女性部の方々が点在している
と思います。これから地域医療や高齢者福祉の関
係で彼女たちと協働するご予定はあるのですか。
早川富博（以下、早川）…先の個別報告で少し
お話ししましたが（P 22 参照）、ロコモ予防、
脳イキキ教室など、要するに足腰が元気でボ
ケないという活動を地域へ普及させることが今
の私の仕事で、そのサークルを2週間に1回ず

つくらい地元でやっています。こちらが向いてやるわけですが、地域の方をどうやって集めるのかというと、その地域の診療所の先生に責任を持って集めてもらい、20人以上集まれば出向くようにしています。

設楽町からさらに山を越えた先に津具村^{つぐ}というところがありますが、3年前、その診療所の先生が30人くらい集めてくださって始まったのが最初です。うちの病院から車で1時間くらい走っていったところで、半年間の予定で口コミ予防教室を始めたら、開催の時間帯にもよりますが参加者のほとんどが女性なのです。そして、半年やって終わるかと思っていたら、参加した人たちがどんどん集まって、ずっと継続して、住民の力でやるようになった。それが外へ伝播し、設楽町の他の地区でもやりたいとオフア^アが来る。オフア^アが来たら行かざるを得ないので、だいたい4〜5人が出張って、2週

違う会で話をしたら、男性にはダイレクトに頼まないのだめだという話が出てきました。確かに、そういうものかもしれません。

地域が活性化するといっても、僕は呼び水をつくるだけで、あとは地域の方がやってくれる。ということ、おそらくそれが基本ではないかと思っています。その人たちが10、20年続くかという、その保証はないのですが、たぶん年齢構成を考えると、40〜50歳代の女性がそこに参加していれば、望みがあります。

—— 高齢者が高齢者を支えていく

成熟した社会を日本は

先陣を切つてくればいい

早川…もう少し違う話をする、認知症予防や地域をどうするかという話をするために、サロンをつくったりする活動をやっています。サロンの運営している人たちは60歳代の女性で、10

間に1回ずつ行くわけです。このようにして、どんどん広がっていくのです。

それはすごく大事だと僕は思っています。そして、半年間が終わると、成果が上がったかどうかを見るためにいろいろなパラメータを取るのですが、このときちょっとした仕掛けを用意するのです。体力を測ってデータを取りたいので、半年たったら、「同窓会」をやるからと言って手紙を出す。そういうことをすると、すごく協力的にやってくださいます。そこでも女性が中心です。

2か月に1回開く研究会では、住民の皆さんも集まって話し合いをしています。そこにも地域の女性たちがワツと集まってきて、「そんなことをやっていたらだめでしょう」などと、僕にも女性たちが言うのです。

では、男性はどこにいるのか。地域の男性に対してはどうしたらいいかというと、この間、

年たつと70歳代になります。60歳代の女性たちが、80歳代くらいの女性たちに呼びかけて月に1回ずつサロンに集まってもらって、おしゃべりをしたり、そこでお話をしたり、体操をしたり、いろいろなことをします。こうしたサロンがたくさんありますが、その運用をどうするかという話が話題になりました。そこは男性陣が出張らなければいけないだろうという話になり、また、次の世代をどう引き込むかという話が課題になってきました。

先ほど河合組合長が、限界集落なのに、そのように感じていないとおっしゃっていました。怒られてしまいますが、僕はやはり限界集落だと思います。ただ、そこにどのような人たちが住むか。今、日本の人口は1億2千万人強ですが、どのあたりまで減少したら良い社会になるかと想定すると、人によって幅があると思いますが、私は4千万、5千万〜8千万人くらいで

はないかと。そのようなことを想定していったらいいのではないかと思っています。

最近、『里山資本主義』という本が出て、僕も読ませていただきました。僕はこの本が出るずっと前に、これに近い真庭^{まにわ}の話を書き置いたのですが、中国地方（岡山県）の話でした。そのときにも先生と話したのですが、里山資本主義は田舎だからこそ成り立つと思ったのです。むしろ人口過密なところでは、うまくいかないだろうと。

先ほど個別報告で先生が話されていましたが、地域の「誇り」を持つという意味で、人口過疎地域のほうが、こうした新しい思想を非常に実現しやすい環境にあると思うのです。人口が過密だと、とてもできない。ある一定のところまで人口が落ちないとできないと思います。人口が落ちていくときに高齢化は避けたい現象で、

そこをどのように乗り切るか。少しおかしな言い方かもしれませんが、すごく希望に満ちた乗り切り方があると思っています。それを示したいというのが、今の僕の基本スタンスです。そのためには、75歳まではしっかりしてもらって、もっと上の85歳以上の人たちを支える。75歳から80歳くらいまでは、例え「老害」と言われようとも十分に仕事ができる。85歳になっても他人に支えてほしくないという方もいるわけです。

それはそれでまったく問題なくて、そういう成熟した社会を日本は先陣を切ってつくればいいわけです。何も昔みたいに戻らなくても、ICT（*3）やIT（*4）などの技術を使って、「里山資本主義」の何パーセントかを取り入れる。そのようなかたちでやっていくといいのではないかと思います。

真庭のように山林のあるところは、それがで

きる。うちの地区もたぶんできるでしょうし、河合組合長のところもできる。僕らが目指す近い将来における地域の姿は、高齢者が高齢者を支え、若い人はそれを参考にしながら生きていく社会です。

ただそのときに、GDPに換算できない地域資源がそこにあったとしても、やはり外から人やお金が入ってこない、今の社会では回って

いきません。なるべく外に対してオープンなシステムを田舎の中で構築することを、地域ごとの特性をふまえながら考えないといけないのではないのでしょうか。JAが強いところはJAが、医療機関があるところは医療機関が、どうやって外から人やお金を集めるのかを考えればいいと思います。

川井：非常に柔軟な意見で、ぎりぎりのところで常に戦っているからこそ出てくる言葉なのだろう、と思いつながらお話を伺っていました。

町田理事長、いかがでしょう。先日ご一緒に、この三河中山間地域に行つてまいりましたが、皆様のお話を伺ったうえで、何かご意見があれば。

町田勝弘（以下、町田）：お三方の話を聞いて、私たちが研究でやっていきたいこと、まさにそれを実践されておられるということで、私は大変感銘を受けました。



早川 富博

今の早川先生のお話の中で、高齢化の話が出ましたが、私どもが昨年、現地で伺ったところでは、高齢化率が38%くらいだったでしょうか。要するに、わが国の30年先の姿がここにあるというお話で、そこからポジティブに考えて、自分たちはその30年先の先端医療の姿を示すのだという先生のお話が、大変印象に残っています。集落のほうにも入らせていただき、旭地区という、かなり北のほうにも入らせていただきました。

早川先生は病院、河合組合長はJA、澁澤先生のところは資源ですが、こうした方々を中心に、コミュニティの核が次第に形成されていく。澁澤先生の話に、まず人の自立、地域の自立という話がありましたが、やはりそこで地域の一人ひとりが納得し、理解して物事を決めてやっていくためには、大変な時間が必要だろうと思います。そこに至るまでの皆さんの日々の着実

な活動がないと、進んでいかないと改めて痛感いたしました。

(※3) Information and Communication Technology ⑥ 略 情報通信技術
(※4) Information Technology ⑥ 略 情報技術

町田 勝弘



「地域」とは、お金によらない 部分で回っている共同体

川井…本当にそう思います。ところで、先ほど「地域」とは何かというお話が、澁澤先生のお言葉の中にもありましたが、中沢先生、そもそも「地域」とは何なのでしょうね。

中沢…「地域」とは、お金によらない部分で回っている部分が確実につくってある共同体のことをいうのだと思います。都会を「地域」とはいわないのは、全体がお金で動いているからです。例えば、社会福祉なども、結局は税金を還流するというお金のシステムで動いています。

「地域」というのは、これは田舎であろうが、都会であろうが、どこでも構わないと思うのですが、その中にお金によって動かない部分、いろいろな言い方があると思いますが、サービスによって人と人を結んだり、助けたりする組織

がある共同体、あるいは人間の住む世界を「地域」というのだと思います。

僕が足助^{あすけ}に行って、ちょっとびっくりしたのは、足助の町の中心に足助病院があり、体のケアも含め、精神的な問題も含め、病院が中心になって動いているのです。基本的には病院がサービスを^{あすけ}行っている。もちろん診療というお金で動く部分もあるのですが、それにはるかに勝る部分を、病院がサービスしていることに、ちょっと驚きました。そして、これからの地域の在り方の一つのモデルがここにあると思います。

例えば、昔はどのようにできていたかという、村の中心にはお寺があったり、神社があったりして、ここはだいたいサービスや贈与で動いているのです。悩み事を持っていて、お寺のお坊さんが解決することも、一種のお坊さんがやっている精神的なサービスだったわけですから、

し、「無尽」や「講」というのは、最初はお寺を中心にして発生してくることが多かったのです。生活の他の部分で、お金で動く生活のベースをつくったとしても、その村の中にそれとは違うサービスの中心地があるということが、とても重要だと思いました。

お祭りを例にとって考えてみると、確かにお祭りをするためにはお金はものすごくかかるのですが、これは別に投資のために使うわけでもないし、自分のもうけのために使うわけでもない。何かきらびやかなものをつくって消費するわけです。それをみんなで楽しむということをお祭りでやっている。ここにも、それに参加すると、その地域が強いまとまりを持つたり、喜びを持つたり感じたりするようになる。それがいったい何なのか。普通のお金の交換とは違う原理で動いていて、人を助けたり、喜びを与えたり、興奮を与えたり、感動を与えたりするよ

うなものが、地域の中心部にセットしてある。それが重要だと思っています。

都市にそうしたものがなくというと、そんなことはないのですが、AKBのコンサートなどに行って、みんなが喜びをもったり興奮したりしています。それは基本的にはお祭りなどによく似た行為ですが、その組織を支えているのは大きなプロダクション、音楽産業であって、これはもう完全にお金で動いている組織なのです。ところが、地域では、そうではないものが動いている。

—— 地域の「幸福」は、

実は「自然」がもたらしている

中沢…お金によらないで、人間同士のエネルギーを動かしているものは、人間を豊かにする力を持っています。そうしたものに参加すると、心がほっこりして、豊かになったような気持ち

になる。あのブータンの国王が言っていた、例の「幸福度」といわれているのは、実はそのことなのです。

では、そのもっと大本は何かと考えると、この大本をどんどん探っていくと、やはり「自然」ということにたどり着いてくるのです。自然は人間に対してサービスをしています。代価を求めているわけではありません。自分たちの力で動いて、自分たちの秩序をつくつていて、人間はそれと協同関係をつくり、地域というものをつくっているわけです。ですから、地域生活のいちばんベースのところには、見えない部分で、ほとんど意識もされていないのですが、「自然」があると思います。

このことを河合組合長は大きく意識して、うちは自然が大事なのだと言っていました。それは百名山だったり、百名水というかたちで、優れた自然景観があるという意味もありますが、

同時に人間を包み込む、人間の生活を抱きかかえ、しかもとても大事なものを人間に与えてくれていて、代価を要求したりしないものが自分たちを包んでいること。結局、これが、あまり意識はされていないのですが、地域生活の豊かさの一番のベースになっていると思います。

例えばブータンという国は、照葉樹林の豊かな自然に囲まれていて、あの人たちが言う「幸福」は、実は「自然」がもたらしていると僕は思っています。

川井さんによる趣旨説明に、これからの世界、個人・行政・企業の三角形の構図がありました（P19参照）、あの描写は少し金融産業的な世界観だと感じました。実はあれには足りないものがあるのです。それらが川井さんの描いた三角形を包んでいる。その包んでいるものが、何か人間に作用を及ぼしているのだらうと思います。

「地域」とは何かというと、それははっきり原理を取り出せるもので、いちばんはつきりわかりやすいのは「自然」に包まれているということですし、自然との関係性が見えないところにセットされていて、その関係性をベースにして、人間と人間との関係をつくっている。これが地域ということではないかと思います。

ですから、ある意味で言うところ、都市が地域にならない、なれないかというところ、そんなことはないのではないか。このことを意識しさえすれば、どんなところでも地域はつくれるし、地域をたくさんつくって、それがお互いに結ばれていったときに、初めてこの世界は変わっていくのだらうという気持ちを持っています。

—— 中世から伝わる「花祭り」の
地域ネットワーク

川井…ありがとうございます。確かに、あの三

です。愛知と信州との境、静岡と愛知と信州の境目のあの地帯には、中世から伝わっている大変すばらしいお祭りがあって、それが村ごとに行われているのです。

しかも、村が全体で、祭りのネットワークをつくり上げていて、あれは同じ日にはやらないのです。だんだん移りながら、その花祭りが行われていて、全体として見ると、あの地域、設楽町の全体、それから長野県でいうと伊那郡、静岡県の水窪町（浜松市天竜区）、この大きな地帯が全体でお祭りネットワークをつくり上げている。このお祭りは並大抵のことでは実行できないくらい大変なお祭りなのですが、それを見事にこなしています。ある時期は、これはもう担い手が減ってきて難しいだろうと思いきや、最近では若い人たちがむしろこのお祭りに熱を上げていて、愛知県などに働きに出て行くところから、お祭りの季節には戻って来たりしていま

角形の図は、産業論的な観点からヒューマニズムを協調してデザインしたものですから、「自然」との関係性のような見えづらい部分をすべて捨象してしまいました。実際、早川先生、河合組合長、澁澤先生いずれのお話の中にも、自然、太陽や水や大地について、明確に言語化しきれないのですが、伝わってくるものがありました。まさにそれが地域の本質的な部分ではないかと感じました。

その目に見えない部分ということになると、自然と祭り、祭りの背景にある人間の心のようなものは、とても密接な関係があるように感じます。そのあたりを、今お話を聞いていて中沢先生に伺ってみたくなったのですが。

中沢…僕は、この三河で河合組合長たちが活動をしているから、ちょっと参画してみないかと川井さんに言われたときに、とっさに頭に浮かんだのは、設楽町の「花祭り」のことだったの

す。

河合組合長のあの発言の背後に、僕は「花祭り」の存在を感じるのですが、いかがでしょうか。

—— 社会共通資本としての祭りが
きちんと位置づけされている
ところには、若者は必ず残る

河合…確かに、高齢化していて、いろいろな祭りを続けていくというのは、それぞれの集落の中で大変な悩みの種になっているという話はよく伺います。祭りのときだけ、まちに出た若い人たちが帰って来るといった話もあります。

やはり祭りというのは、どこの集落でもそうですが、子どもからじいちゃん、ばあちゃんまで、みんなが参加して、コミュニティをつくるわけですから、本当にすばらしい場だと思っています。

香嵐溪のシンポジウムについて申し上げたか

もしませんが、全国の過疎化対策のシンポジウムのようなものが行われており、私の地域でもいろいろな取り組みがされています。そのときに、たしか早稲田大学の先生だったと思いますが、やはり社会共通資本としての祭りがきちんと位置づけられているところには、若者は必ず残ると。全国のデータで見ても、必ずそうだと思います。

ですから、その意味では私どもの地域は、集落の神社の祭りもありますが、花祭りがあつたり、古くからの郷土芸能のようなものがたくさんあります。「棒の手（*5）」「黒沢田楽（*6）」など、いろいろなものがあります。そうしたところが一つのコミュニティの場として、集落の機能が成り立っている要因ではないかと思います。

田舎には、社会の共通資本があり、人のまとまりができる原点があるのではないかと思っています。

この人たちの力というのは、本当にすごい。

これが農村の力だと思います。それはお金がもらえるからやっているわけではないのです。みんなで支え合っていく。こうしたことがある限り、農村はずっと続くのだらうと思っています。

（*5）五穀豊穡を祈願して、剣術、棒術、薙刀術など日本武術の形を踊りにした伝統芸能。愛知県近郊では棒の手と呼ばれているが、地域によっては棒術、棒踊りなどとも呼ばれているところもある。

（*6）新城市七郷・色字里沢地内で、集落の繁栄と平和、五穀豊穡を祈願して行われる踊りや遊びなどの伝統芸能（国指定重要無形民俗文化財）。例年2月の第1日曜日に一般公開されている。

社会教育はどの集落にもある。 その最高の場が「祭り」

川井…ここまで地域というテーマで、最初は自然との関係性、そしてお祭りに託された機能など、協働活動について伺いました。それらの根っこにあるのは、どうも農業を中心とする第一次産業のようにも思えるのですが、このあたりは本当にすべて相通じるものがあるのですね。人

います。田舎には、お寺や神社以外にも、人の結びつきがあります。先ほどの早川先生のアンケートの中に、鳥獣害の被害がひどくて困っているという結果が出ていましたが、最近では二ホンジカがものすごく増えてしまっていて、あちこちの農作物を食い荒らす状況が出ています。今、国も本腰を入れはじめて、環境省とも調整しながら、駆除対策をいただいています。

侵入防止柵といって、ワイヤーメッシュで、うちの集落も本当におりの中で暮らしているような状況になっていますが、4年間で総延長380キロメートルにも及ぶワイヤーメッシュを設置しました。うちの常務が言っていました、380キロというところ、愛知県新城市（しんしろ）から福島県までの距離です。それを集落の人たちは自分たちでやる。お勤めの人もずいぶん多いわけですが、土日にみんなが寄り集まってやるわけです。

間の営みとして、今我々がいちばん忘れかけている部分が掘り起こされてきたような気がいたしました。

澁澤先生、ずっと地域で、「聞き書き」の活動を中心に、ご高齢の方々のお話を聞いたり、若い人の教育に携わったりされている中で、何かお感じになられたことはありますか。

澁澤…祭りがすごく重要だというのは、どこへ

川井 真



行ってもそうだと思います。三河でも、お話を聞いていて、祭りとは何の場かと聞くと、「教育の場だ」とおっしゃる方が多いのです。「棒の手」の話がありました、それを伝承していく過程で、集落内で教育をやっていくのです。今、高校生になったときに都市に出ると、下宿代を含めてほしい一人年間100万円です。高校3年間で300万円、大学へ行くと1000万円から1300万円のお金を持って、みんな都市に出て行って、その子たちが帰ってこないのが、今の農村の現状です。

先ほどの、個別報告で話した岩手県大槌町の吉里吉里きりきりの話もそうですが、学校教育とはまったく異なる社会教育がどの集落にもあり、その最高の場が祭りのだろうと思います。それは何かというと、要するに生きるための教育をしていく。非常に人間的に深いものもその中で教えていきますし、社会の中での自分たちの

のままでいたら自分がだめになるといって地域に入ってきます。

それなのに誰も食えなくなっていないのです。地域に入ると、お金になるもの、ならないものも含めて、いろいろな仕事があります。それをメニユー化しようといって、メニユー化しました。全国で「百業ネットワーク」というものをつくり、地域にそれぞれのようなものがあるか。月3万円の仕事から、月5万円、8万円の仕事、それを自分の好きなように組み合わせることによって、月20万円の収益が得られる。

ところが、やってみたら、そうではないことがわかりました。人が地域に入っていくと、その人の個性によって、来る仕事が異なる。それはまさに自然や人との関係性で決まるので、画一化できないのです。20家族で50人くらいの人たちがいて、自然とそれぞれに役目ができていきます。にも関わらず、彼らは、まちに行くと

役目も、その中で逆に与えられていくことによって、みんな生きがいを持っていくということがあると思います。

―― 専業農業ではなく、
「農的暮らし」がしたい人々

瀧澤…先ほど話をしたトヨタ自動車と豊田市とでやっている人材育成ですが、年間30人程度が参加し、5年くらいやっています。その方々のうち約20人、その家族を含めて50人くらいが地域に入りました。地域には、働く場所がないだろうとよくいわれます。まず仕事をつくらなければ、地域に若い人たちは定住しないといわれるのですが、どちらかというと今の若い人たちは、先に仕事を辞めて地域に入ってしまう。僕たちのところは仕事を見つけてから地域に入っていました。今の人たち、3・11以降の若者たちというのは、先に職場を完全に辞めて、こ

自分の役目が見えなくなってしまう。とくに、一昨年くらいに65歳を迎えた団塊の世代は、今、行き場がないのですが、その人たちも少しずつ地域に入ってきています。

彼らは農業を専業でやりたいわけではなくて、「農的暮らし」がしたいのです。要するに自然と触れている暮らしがしたい。コンビニにも買い物に行くし、一般的な経済活動もやるけれども、「自然」にも触れたい。農協に出せるほどではないけれども、自分の食卓に並ぶ野菜くらいは自分でつくれるようになりたい。兼業農家になりたいということかもしれませんが、とにかくそのようなニーズがたくさんあるということがわかりました。こうした人たちが何となく暮らせるという意味では、日本という国は豊かなのかもしれないし、たぶん彼らのような人たちが新しい日本社会のモデルをつくっていくのだろうと思っています。

は、私は非常に楽観的に考えています。

—— 若者たちは、日本人の

先祖返りのほうへ

向かっているのではないか

その意味でいうと、先ほど早川先生がおっしゃったとおり、今、都市の過疎化のほうがあるかに深刻なのです。多摩ニュータウンにしても、高島平にしてもそうなのです。助けてくれるところがないし、生存の基盤がお金しかないですから。少なくとも、地方に行くと、どんなに過疎化、高齢化していても、年金が入ってきます。それから自分の食べ物をつくる土地があります。そこでの人間関係づくりは、都市で生きるよりもはるかに楽です。震災以降、すぐ時代が変わってきて、そういう若者が圧倒的に増えた。

その人たちは、もう物質的豊かさは求めている。経済的、物質的豊かさは、もう十分だし、しかし、自分たちは、自分の手でデザインをして、自分で生活の基盤をつくっていききたい。その中で人間関係もつくっていききたい。そのような若い人たちが急激に増え出した。その意味で

川井…今、都市における過疎化のお話がありましたが、まさに、都市が直面している問題として、高齢化する団地問題があります。公のシステムとして国の支え、あるいは自治体の支えというかたちで何か対策を練っていかない限り、もう自分たち個々の努力では、なすすべもないという地域がかなり大量に出てきています。非常に難しい問題だと思います。さて、中沢先生、いかがでしょう。地域の抱える問題は様々ですが、澁澤先生からは、お祭りと教育の関係、生きるための教育といったご発言があり、そして、今の若い人たちの感覚も変化しはじめているというお話がありました。

実際、これからの人たちは、農業の再生と第一次産業への意識も含めて、何をよりどころにして、どのような方向に進むと見ていらっしゃるのですか。

中沢…昔の若い人たちはだいたい左翼に行ったのですが、今の若い人たちは保守、右翼のほうに非常に関心がある。そして、それを憂う人たちもいる。ですが、僕などが見ていると、ちょっと過激な国粹主義のようになってしまっている部分もあるけれども、実はこの若者たちは、日本人の先祖返りのほうへ向かっているのではないかという印象を、むしろ持つのです。

—— 日本人はもともと半農半漁で、

専業ではなく、なんでもやる

「百姓」だった

中沢…宮本常一さんたちの研究所がやっていたことは、非常におもしろいことですが、宮本常

一さんの考え方自身、よく見てみると、日本人というのは、もともと半農半漁なのだということを強調しているのです。宮本さんの研究所にいた網野善彦（*7）さんなども、日本人というのは、もともと海民で、半農半漁なのだと。半農半漁ということは、専業農業などということとはやっていなかったのだということを言うのです。

農業をやる日本人がどこから渡って来たかという、南のほうから渡ってきています。その人たちの食生活や生活形態、ものの考え方をよく調べてみると、だいたい半農半漁なのです。これを網野さんの言う「百姓」と言ったというわけですね。「百姓」というのは、何でもやる、つまり、どちらでもやるのですね。その中で内陸部に入っていく、土地を持った人たちが、だんだん専業化した農民になっていった。でも、もともと日本人というのは半農半漁なのだと。

それはもとを正してみれば海民としてこの列島に渡ってきているので、当然のことなのです。

ですから、半農で兼業になっていくという状態を見ていても、これは一種の先祖返りで、むしろ專業農家というものの自体が、ある時代から日本人の生活形態として型が決まってしまったところがあるけれども、内面では漁業、商業などに自在に伸びていく柔軟さを持っている国民性のような気がします。

今、農業ではなくて、生き方として「農」を求めている若者が非常に多い。彼らは、お金に換えていく産業ではなく、その大本の部分の自然との関わりのほうに引つ張られている。別に專業であろうが、兼業であろうが、たいした違いはないのではないか。むしろそのような生き方へ向かっているのだと思います。

（※）網野善彦（1908—2004）歴史学者、元神奈川大学教授。
「日本」とは何か等、著書多数。



中沢 新一

求めようとしている人たちが、これは無意識なのですが、原型的な日本人の生き方に自然に還っているというのが、僕には普通の状態として見えるのです。

それは決定的に今までの日本、60年間つづけてきた、この戦後社会の在り方が大きく変質している時期にきているのだと思います。ですから、この若い人たちがちよつと保守的な考え方

新しい生き方を求め、 原型的な日本人の 生き方に還る若者たち

中沢…都市生活をしていた若者が、3・11以後、大量にＩターンというかたちで地方へ行っています。とくに澁澤さんがやっている岡山県は多いのです。それから隠岐の島の海士町^{あま}などを見ていても、若者が集まって、しかも、漁業を中心とした本場に半農半漁の生き方ですが、その生き方を自分たちが理想形態だとして追求しようとしています。たぶんこの人たちは、生活が苦しいからといって都会へまた戻って行ったりすることは、あまりないのだと思います。

そうしたことを見てみると、日本人が、明治維新以後、資本主義化し、産業化し、今度は金融グローバル資本などというものに席巻されているけれども、その中から何か新しい生き方を

になったり、今までのリベラルな、左翼とは違う考え方を持ちはじめても当然だと感じています。

もちろん、それが変な方向に引つ張られようとしている部分もあって、これはとにかく右も左も、僕はだめだと思っています。今までの左もだめだし、今の右もだめだと思う。それよりもむしろ、地方へ行つて、新しい生活形態を自分たちで生み出そうとしている人たちの生き方が、これからの生き方のいちばんモデルになっていると思います。

川井…それは今の若い人たちの中に、新しい感性のようなものが芽生えはじめていると理解しているのでしょうか。今年、2014年は国連の「国際家族農業年」、まさに家族農業というのは、農業あるいは医療を産業化しているこうという昨今の流れとはまったく逆行していると思うのですが、そのあたりはどのようにとらえていらっ

しゃいますか。

中沢…産業としての農業ではないということ
とです。これは実は花祭りの話です。「花祭り」
というお祭りは、今、山間部でやっていますが、
あのお祭りは、もとは海民が持っていた芸能で、
あれが山の中に入り、しかも残って、その村の
アイデンティティをつくっている。ということ
は、あの山間部に入っていた日本人だって、
もとは海と非常に深い関わりを持っていた日本
人です。

「農」という言葉はものすごく柔軟で広い言
葉なのだと思います。農地にくくりつけられる
ようにして生きるという農民ではない「農」を、
日本人はつくってきたのではないでしょうか。
それを宮本さんたちはもう一度、もとに戻そう、
現状を見直そうということで、農民を追求して
いたのではないかと僕は理解しています。

いという意識の根っこにあるものが何なのか。
それから、どのようなかたちでその人たちを、
例えば今の三河地域に迎え入れていこうかとい
うことを考えていきたいと思っています。

中沢…3・11の後、岡山県にずいぶん若者たち
が入ったという話をしましたが、同じ中国地方
に祝島^{いわいしま}という島があるでしょう。あの小さな瀬
戸内海の島は、長い間、脱原発運動をしてきた
島として有名になったところですが、この島に
も若い人たちがたくさん入っていました。

ところが今、ちょっとした問題が発生してい
る。都会で生活していた若い人たちは、農のあ
る暮らしを求めているから、すごくエコ意識が
高いのです。ゴミの捨て方から、洗剤の使い方
などにもものすごく敏感なのです。その人たち
が村に住んでみると、村のおばあちゃんたちは
昔からの生活ですから、洗剤をがんがん使って
食器などを洗っている。しかし、一方では、自

——若者たちと地域の人たち。

二つの意識がどう結合し、
もみ合っていくのか

川井…ここまでのお話の展開は、地域における
お祭りの役割から、農業の形態の話、そして、
若い人たちが農業一本やりで生計を立てていく
というよりは、農のある暮らし^しというところ
にすごく魅力を感じているというお話があつ
たと思います。先日、河合組合長のところに伺つ
たときにも、限界集落化する地区のお話があり
ましたし、これからＩターンも含めて後継者の
問題がクローズアップされていきます。あの地
域には貴重な野菜などもたくさんあるわけだ
が、その継承について皆さん、すごく心配され
ていました。

そこで、今の若い人たちが、これから農業に
従事する、あるいはこんな地域で暮らしてみた

分たちは自然の暮らしを守らなければいけない
と考えている。

そうすると、若い人たちがおばあちゃんたち
に「洗剤を使ってはいけない」などと言うので、
むっとするわけですね。自分たちは普通に長い
間やってきたのだから、そんなことは言われた
くないと。ここで、些細なことなのですが、だ
んだん気持ちの離反が起こってしまったて、Ｉ
ターンで入った若者たちと、ずっと島で暮らし
ていたおばあちゃんたちの間に感情的な対立が発
生していることについて、どうしたらいいだろ
うという話を聞かされたことがあります。

そうした問題というのは、どこでも発生する
と思います。それは若者たちにも問題があると思
います。ものも言わず、理論も立てず、言葉
にもせず、自分たちの生活をつくってきた人た
ちの暮らしの奥に潜んでいる合理性を理解しな
いで、自分たちが頭の中でつくったエコロジー

の感覚と知識で、おばあさんたちの暮らしを判断する。おばあさんたちは、若者たちが背景にしている新しい考え方にちよつとなじめない。ここで二つの意識の対立が発生してしまう。これはどこでも起こってくると思います。

河合組合長と以前お話ししたように、愛知東に都会からの若者呼んで、サマースクールの農学校を開こうとなったときに、ここで二つの意識がどう結合し、もみ合っていくのか。そうしたことが起こったときに、これ乗り越えないと、次の世界、次の時代の地域世界はつくりえないように思います。

河合組合長、サマースクールの農学校についてどう思われますか。

去にあったような気がします。その意味ではちよつと苦い経験になったかと思います。

先ほど個別報告でもご紹介しましたが、最近、Ｉターンで移住される皆さんが、この何年かずっと、ＮＴＴに勤めていた、パナソニックに勤めていた、東電に勤めていた…というように、年収がすごく高いのです。そうした彼らが、どうして40代くらいときに職場を離れて農業に就こうとしたのか、本当に最初は疑問に感じました。もう10年来、ずっと受け入れをしていますが、彼らの農業や集落との関わりを、最初、私はとても危惧しましたが、今の若い人たちというのは、すごく感性があると思います。

私どものところにはトマトをやっている農家が非常に多いのですが、10年前に移住して来た人たちが今、年間で2000万円以上を売り上げる農家に育っています。そうした所得を上げながら、きちんと集落とのいろいろな関わりを

—— 所得を上げながら、
集落との関わりを

大事にするＩターン移住者

河合：農村が人口減少や高齢化になって、ずいぶん久しいわけです。今の新城市が合併する前は、作手村^{つくで}というところだったのですが、当時、村長が、人口がどんどん減少するものですから、住宅対策ということで、村営住宅をつくり、極端なことを言えば、来ていただける人は拒まないといつて、いろいろな皆さんを受け入れた経過があります。

都市から来た皆さんには当初、30〜40戸に住んでいたのですが、やはり集落のいろいろな共同活動があったり、もちろん祭りもあるわけですが、農村の昔からの慣習^{かんしゅつ}というか、みんなでやることになかなかじめなくて、何か一つの島ができてしまった。そうしたことが過

大事にして、一生懸命やっていたいています。そのようなことがあるから、昔はお年寄りなどは都会の皆さんが来ると、何か非常に閉鎖的になっていましたが、先ほど中沢先生の女性部の話でも出てきたように、今は素直に受け入れができるような体制づくりができてきたと思います。そういう意味では、都市部の若い人たちと農村の結びつきは、これから高まっていくので

河合 勝正



はないでしょうか。

しかも、私どもの地域は空き家がすごく多いのです。昨日、一昨日も市の職員といういろいろ話をしていたのですが、本当に管内に300戸以上の空き家があります。それだけ都会に出て行ったから家が残るのです。その半分近くはリニューアルをしなくても住めそうな家です。

ただ、都市部に出て行っても、お盆や正月には、先祖供養をしなければならぬから戻って来る。だから誰にでも貸してよいということにはならないということで、賃貸とか譲り受けるというときに若干の障害はあるようです。ただ、これからも今のような状況が続くとすれば、ちよつと楽観的かもしれませんが、意外とそうした住宅問題も解決していくのではないかと私は感じています。

その中で、ちよつと手前みそなのですが、いちばんいい教育は「聞き書き」をやらせることです。聞き書きって、聞いて書くだけと思うでしょう。例えば、岐阜県に加子母^{かしも}というところの^{とうのうひのき}東濃檜で有名な集落があります。そこは、嫁さんで入って来た女性たちには、じいちゃん・ばあちゃんの聞き書きを必ずさせるのです。そうすると、じいちゃん・ばあちゃんにとっては、自分の自分史が残りますから、それをつくってくれた子に対しては、まさに孫娘になっていくのですね。

それから、もう一つ、「聞き書き」というのは、相手の言葉だけを聞いて、それを書き止めていくので、その相手に重なっていくという行為になります。そうすると感情が重なるのです。ルポや取材だと、聞き手側で文章をまとめられるのですが、「聞き書き」というのは話し手側の話したことしか書けないのです。そうする

――移住者に徹底的にお節介をする

「お節介集団」をつくる

瀧澤…今、早川先生や私たちが入っている豊田市の中山間地ですが、「空き家バンク」を行政でやったのです。倍率が百何倍で、待っている方が何百人という単位でいらっしゃいます。

しかし、今まさに組合長がおっしゃったようになかたちで、仏壇があるなどして、空き家が出てこない。それは、「お節介」が、その集落にいないとできないということがだんだんわかってきました。だったら、「お節介集団」をつくらうということで、半官半民みたいなかたちで、地域のNPOやそういう活動と豊田市が一緒になって、「おいでん・さんそんセンター（*8）」をつくりました。そこが徹底的にお節介をする、それから、入って来る人たちへの集落への入り方を教育していくというやり方です。

と、話し手側に自分を重ねていく行為になるので、外からイターンで入って来た人たちと、じいちゃん、ばあちゃんたちの接点、要するに心の接点ができいくのです。その中間に、ただニーズとシーズがあるからというのではなく、何かお節介のシステムとお節介な人が必要なのです。そのあたりがだんだん地域に育ってきているように感じています。

(*8) URL <http://www.oiden-sanison.com/>

瀧澤 寿一



『聞き書き』は、つなぐ役割。 ぜひ全国で利用したほうがいい

川井…非常に興味深いお話ですが、実際に「聞き書き」のご教示を受けた早川先生のご意見はどうでしょうか。

早川…足助地区でもやっていますが、澁澤先生のおっしゃったとおりです。導入されてからもう7、8年近く、連綿と続いていると思います。が、拝見するたびに、すごく有効な手段だと思っています。医学部の学生の教育にも使わせてもらっているのですが、学生からもすごく喜ばれます。

聞き書きの対象となる患者さんは、僕が紹介するのですが、ほとんど接待されて、あれを食べ、これを食べ、泊まっていけと言われた女子学生もいました。それはまずいだろうと僕が迎えに行きましたが、お年寄りと若者をつなぐと

いう意味では、「聞き書き」というのは、ぜひ全国で利用したほうがいいと実感しています。中沢…「聞き書き」というのは、民俗学をやるうえで、昔の暮らしを聞いてそれを書くという行為だったのですが、だんだんそれがもつと積極的な意味を持つようになって、生きた武器になりつつあるということですね。これはすごいですね。

早川…足助の中学生が「聞き書き」に参加したという話があって、中学生が喜んで話を聞くというところで僕もびっくりしたのです。そして、聞く相手がだんだんと、たぶん澁澤先生がはじめに想定された地域の「名人」などではない、一般のお年寄りになってきていますね。それでもいいのではないかと気がします。

澁澤…今の中学生はみんなスマホの世界なのです。スマホで扱う情報量、例えば「おはようございます」とスマホで送ると、ビット数でいう

と8ビットなのです。それが対面で聞き書きをする場合、2秒間「おはようございます」と言うのと、それは確か8000万ビットくらいの情報量なのです。目で見て、相手の表情を見て、

空気を感ずる。今の若い子は、情報が多様になっているようで、実は浅くなってきたいて、すごく情報量が少ない。なおかつスマホという誰かが設計したシステムの中で生きていくわけです。「聞き書き」は、そこから引きずり出していく作業です。

だから、その中学生や高校生も「聞き書き」に行った後に、すっかり変わってしまった大人になるのです。キレそうだった子も落ち着いてくるというようなことがある。手前みその話ですが、でも、これはけっこう有効だと思います。中沢…重要な話ではないでしょうか。これから都市から入って来る子たちと、今まで村の中で暮らしていた人たちの間をつないでいくために、

それは非常にクリエイティブな「お紹介」だと思いますね。

川井…早川先生も自分でお試しになってみて、実際、どのような感覚なのですか。

早川…僕は、学生にモデルとして聞き書きされたことがあります。医学部の学生の教育にもすごくためになります。やはり、ずっと心に残るのでしょうか。先ほど澁澤先生がおっしゃった「自分を相手に重ねていく」という話は、そのとおりだと思います。2日か3日くらい通って、一日2、3時間「聞き書き」するのですが、それは彼らにとっては非常に良い経験になって、ゆくゆくはいい医者になると確信しています。

—— 認知症などの

「予防医学」のモデルを

地域全体としてつくり上げたい

川井…「医者」という話が出てきました。農業

の後継者の問題から急にシフトして申しわけないのですが、中山間地域が長い間抱えている大きな問題の一つとして、医師不足があります。足助病院もいろいろ課題を抱えていらっしやると思いますが、あの地域で医師としてやっていくというのは、かなりしんどいことでしょうか。早川…それは不徳の致すところで、私たちの地域というか、私たちの病院自体に魅力がないと、やはり人は集まらないと思います。ある意味、やむを得ない面もあるのですが、だからこそ努力するというのがバネになっていると思っています。

例えば、60歳以上の人がどうしてイターンして来るかというと、そこにやはり医療的な安心感があるからだと思います。

住む人たちがいるから医療があるのか、医療があつたら人が住んでくれるのか、どちらが先かわからないのですが、とりあえず今は、ある

だと思っています。その意味で利用していただければいいという話です。

そういうことをずっとやっていくとなると、薬だけではなく、生活自体、食生活、運動の仕方、認知症の予防などに深く関わっていかないとけない。そうした「予防医学」的ものを地域全体をフィールドとしてつくり上げていくことが今の目標です。

足助地区でそういうことを住民も参加して、みんなで話し合いをして取り組んでいるということになると、それがモデルとして、世の中にある程度アピールできるのではないかと考えています。

—— 地域に少しお金が入ってくるような

「うちにこもりすぎない」

かたちを目指す

早川…一昨年ですか、中沢先生に、「うちにこ

程度 of 医療を用意すれば安心感があるだろう、だから人が来るのだと。こうした話を地域の人たちに申し上げています。

ただし、ことはそう簡単ではなく、医師を集めるためには何か興味をひくものがなければいけない。それで、僕らは今のところ、「予防医学」的なところで興味を持っていたかどうかと言っているわけです。

先ほど「地域の人たちが参加する病院」と申し上げました。診療所が少ないものですから、地域のほとんどの方が当病院にお見えになるのですが、参加するというのは、病院をうまく利用するということです。健康を守るために、地域の方が、2か月または半年ごとに、元氣であることを自ら報告に来ていただくと、お薬を出す。血圧、糖尿病などのコントロールで外来に来て報告することで健康管理をする。ですから、生活習慣病の治療というのは、予防医学の一つ

もりすぎてもいけない」ということを言われしました。外に出ろという話なので、経済的にいうと、外からお金を呼び込まなければいけない。お年寄りが集まれば年金がたくさん入ってくるのでいいのですが、それだけだと何となく寂しいので、住民も健康になって、かつこの地域にもお金が入ってくるような戦略を立てなければいけないと考えています。

それは、住民の人たちが参加して臨床研究とか、そういうものを地域の中でつくっていく。例えば「これを食べると健康になります」「認知症予防ができます」ということを実証したいという企業があれば、それはウェルカムだ。地域で住民に集まってもらい、こういうものがあるけれども参加しないかという話をするということとです。

また、今、認知症予防で話を進めている取り組みは、いろいろなコミュニケーションの工夫

次第で予防できるものがありそうなので、それをサロンで紹介していただき、そのようなことをモデル化するプロジェクトチームをつくって、地域で展開するというものです。たくさんの方が興味を持ってこのプロジェクトに参加してくれるかもしれない。僕らが今立ち上げた研究会は、そうした参加者に授業料を払っていただくかたちにしたいと思っています。

私たちの強みは、医療機関があつて、住民が非常に協力的であること、その関係性の中で研究会が中心になって、予防的な取り組みのお話があつたときに、ふるいをかけることができることです。住民から、そんな話はだめだ、そんなモルモットみたいなことはだめだと言われれば、それはやめます。一定程度、実証されていて、これをやれば、みんな健康になるだろうとか、生き生きするだろうというようなことを、外から資金を投入してもらうかたちで取り入れ

早川 富博



て、地域全体が健康になることを目指せば、十数年くらいは、ある程度の「予防医学」のモデルとして成り立つのではないかと思います。その大本は、やはり食です。食べるものに關しては、僕らもJAグループの一端を担っているので、先ほど河合組合長がおっしゃったように、食、農産物と健康との関係にまじめに取り組んでいくことが、農村医学会としてのテーマ

でもありますし、僕自身のテーマだと考えています。

中沢さんに言われたように、うちにこもりすぎず、地域にだけお金が入ってくるようなかたちができると、そこに興味を持つ医師も当然出てきます。予防医学的、公衆衛生学的な話にリンクするということで、先の長い話をしています。10年くらいすると医師も余っている、たぶん大丈夫だろうと。10年前からそう言われていますが、今のところつぶれてはいないので大丈夫だと思います。そのようなことを考えています。

—— 食を支えているJAは、

日本人の暮らしのいちばん

ベースのところにある組織

川井…中沢先生、そんなことをおっしゃったのですか。

中沢…いやあ、あまりよく覚えてないです（笑）。でも、それが大変な結果を生んでいるようで…。今、早川さんもおっしゃいましたが、食という問題が、JAだけでなく、日本人の意識の中ですごく高まっているでしょう。今の朝ドラ（*9）がなぜあんなに人気があるかというと、やはり「食べる」といういちばん基本的なところで物語を掘り下げているのです。あの意識は、国民の中にけっこう共有されているんですね。

JAとは何かというと、やはり食を支えている組織です。これは賃金労働者としての消費者の連合と大きく異なるところで、JAは食を支えている大組織なのだと思います。食べることに關しては、暮らしのいちばんのベースでもあるし、ですから、日本人の問題のいちばんベースのところに、この組織があるのだろうと思います。

先ほどの早川さんのアンケートなどを見てい

でも、タクシーに乗らなくてもいいから、食事と栄養管理だけはきちんとやろうという話が出てきて、そのとおりだろうと思います。地域、農村部に給食センターのようなもの、あるいは人が集まる場所で、食べ物を提供する場所をつくっていくというのは、これからとても重要になるだろうと感じました。

三陸の被災地でも、みんなが集まって来る場所をつくる。そこで食べ物を提供し、みんなで食べることがすごく重要になっています。みんなが食べることの持つ意味は、これからすごく大きくなっていくような気がします。

川井：町田理事長、いかがでしょう。六次産業化への取り組みも含めて、食をベースにした地域産業の再構築、そこには医療やエネルギーなどセーフティネットの問題もいろいろ絡んでくると思いますが、我々も何かそういうモデルを追求してもいいのかもしれないですね。

をこれから、今日のご報告、ディスカッションなどをふまえて、さらに進めていけたらと思います。

(*) (9) NHK「J A共済総合研究所」(2013年10月～2014年3月まで放送)

—— 農産物を食べ物にしていく過程を、

一つの喜びとして

組織の中に組み込んでいく

川井：今、中沢先生がおっしゃったとおり、社会全体が「食」というものを意識しはじめていることを感じます。意識的なか、無意識的なかはわかりませんが、食の重要性に、もう一度目を向けようという動きは確実に始まっていますね。

中沢：河合組合長のところの女性部会で、僕がいちばん感動したのは食事なのです。彼女たちが食事をつくってきて、お弁当をつくったのですが、見事なものでした。とてもおいしかった

町田：まさに今回のセミナーのテーマの根幹に関わるようなお話だと思います。今、中沢先生がおっしゃったように、安全なことはもちろんですが、皆さんが安定的に食べられるということとは非常に大事なことです。すべてのベースが食ということで、J Aグループの果たす役割は本当に大きいと思います。そこには栄養や食習慣の問題もありますし、医療とも関係が深いと思います。

余談になりますが、先日、NHKの番組制作の担当理事の方とお話する機会があったのですが、農業や農村を取り上げた番組を地方局発でもいいから、もつとつくってほしいと私から申し上げたことがあるのです。そうしたら、「毎日やっていますよ」と言われて、それが『ごちそうさん』でした。ああ、なるほどと(笑)。

農業と農村の存在意義は、食と深い関係を持っていますので、そういう意味でも食の問題

です。そして、話を聞いてみると、お弁当をつくるのがすごく喜びで、それを人に食べてもらうことが、また喜びになっている。テレビドラマの主題のようになっていますが、あの感覚は今、けっこう行きわたりはじめているのではないのでしょうか。

女性たちがいろいろなもの、物産をつくっているでしょう。その工場にも行きました。みんながつくっていて、ものすごく楽しそうなのです。ですから、農産物をつくるということ、それを食べ物にしていく過程を、一つの喜びとして大きな組織の中に組み込んでいくと、とても豊かなものが出てくるような気がしました。

川井：私もまったく同じことを感じました。なぜ、あんなに上機嫌で働けるのでしょうか。それがすてきだなと思います。

先ほど私のスライドの中でも言いましたが、無理をしていないですね。明らかに生活の延長

線上にあります。仕事をどんどん自分で増やして、大いなるお節介〃をしているのですが、非常に機嫌よく働いている。上機嫌な労働者たちです。この方々のことを、河合組合長、何かひとことお願いします。

河合…本当にそのとおりだと思います。喜びを感じながらやっています。皆さんに「おいしい」と食べていただくと、本当に喜びがわくわけです。

うちは「次郎柿」のそれなりの産地ですが、選果場で、選果外れの柿がずいぶん出るわけです。昔は二束三文で売ったり、廃棄したりしていたのですが、彼女たちはすぐにそれに目をつけて、柿酢ができないかと。柿酢も、お酒をつくるのと一緒に許可がなかなか厄介なのです。でも、自分たちがやれないからという話で、JAで資格を取り、彼女たちに請け負っていただいたわけです。するとまあ、次から次へという

ませんが、何かやれることがありそうだなと思っています。

早川先生からは発芽玄米の話など、いろいろなことをいつもご提案されて、そのプラントをJAでつくったかどうかというお話もあります。農業と人の健康とのつながり、といった部分で、病院と何かつながりを持ちながら、国の事業の補助も少しいただいてやれるような方向が目指せると、農村、農業者サイドも取り組みやすいし、国民も健康な生活が送れるというわけです。そういうことにつながると、これ幸いではないかと思います。

川井…食と健康、この二つは本当にキーワードですね。今、日本食が非常に注目を浴びているのも、その背景には健康を求める意識ということがあるわけですし、見た目の美しさや味の魅力もあると思いますが、いちばん大きいのはやはり「健康になれる食事」というところにある

いろいろなことを考え出し、地域の農産物を使ったいろいろな加工品を産み出します。どこからどのような知恵や実行力がわいてくるのかなと感じています。彼女たちにはすばらしい活動をしていただいていると、私自身、いつも思っています。

医者と農業は大きくいえば、 人の命を守る仕事

河合…それから、先ほど早川先生が食と健康という話をされていましたが、医者と農業というのは共通する部分があると思います。それは何かというと、とらえ方はいろいろあるかもしれませんが、大きく言えば、人の命を守る、命に関わる仕事であるということです。これだけ社会保障、健康保険制度が大変な状況になると、やはり予防医療ということも考えていく必要があります。食との関わりも、医食同源ではあり

気がします。それは日本の大きな武器になるだろうと思います。

今の「健康を維持するための食」という声にこたえて、足助病院の活動で食にまつわる取り組みについて、何かお話しいただくことはありますか。

早川…厚生労働省の指導で、栄養をサポートするNST（ニュートリション・サポート・チーム）が病院の中で活動しなくてはいけないという話になっていまして、うちでも立ち上げています。うちの場合は、そのチームが外へも出て行って、地域住民の人にレクチャーをしながら普及活動をしています。その中で、自然と農業が産み出したものが問題になってくるのですが、お話があったように、発芽玄米という、ある意味、付加価値のついたお米をつくり、それを肥満予防、糖尿病予防に役に立てられないかと考えています。

いろいろな食材があると思いますが、僕らは栄養学の先生と一緒に取り組みますから、そのためには地域のお年寄りのデータも必要です。タンパクが少ない、貧血がある、足腰の筋力がどうか、科学がどんどん進んでいますから、それをベースにしながら、どのような食材をそろえ、どのような食事を普及していくかですね。

—— 栄養学にもとづく知識普及が課題。

地元のお米にも健康面の

付加価値をつけたい

早川…この地域のお年寄りたちは肉を食べないのです。なぜ食べないのかというと、もう40年も50年も前に、肉はコレステロールが高いので食べてはいけないという話になって、それが非常に普及しているのです。いくら間違っていると言っても、なかなか言うことを聞かない(笑)。その一方で、千人単位の栄養調査をすると、

何と、お年寄りの乳製品の摂取率が非常に高いのです。これもたぶんコマースリズムや、いろいろな影響があって普及していると思うのです。

データをとりますと、農村地帯ですから、お米を食べるのは当然なのですが、意外にも朝はパン食が多いというデータも出ています。こうした状況を一気には是正できないのですが、その中に医療的、科学的な情報が入り込んでいけば、もう少し改善できると思います。

それは、本来は保健所、保健師さんたちが昔からやってきたことですが、なかなか進まないところがあります。メタボが定着してきているのですが、これから先はロコモや低タンパク質といったことも見据えていかなければいけません。その意味では栄養学の教育は非常に大切だと思います。間違った知識でいくと、補助食品をたくさん摂ったほうがいいとか、とてもまず



いことになってしまい、いろいろな問題が出てきます。

健康のとは食と運動ですから、その食のところをいかに正確でより良いものにしていくか、どうやって普及していくか。ただし、おいしくなければいけないということがいけばんのミソだと思います。それは付加価値をつける意味もありますが、自給という意味でも、地元のお米をたくさん食べたほうがいい。その意味で、お米に健康面の付加価値がつけられないかと僕は思っています。

「パンなんかとんでもない」と、私はいつも言っています。パンには輸入小麦ばかり使われているのに、どうしてそんなものを食べるのかと。米粉パンがあるではないかと。うちの地域だと米粉パン率は20%くらいですから、それを食べるように普及活動をしています。

——日本の武器は、土に接触した

二次的なもの。

自然との輪を絶対に壊させない

川井…さて、食と健康についての話題が続きましたが、このあたりで中沢先生のお考えをお聞かせいただけませんか。

中沢…日本の武器、国際的な武器というのは、英語で言う「primary」、一次的なもの、一次産業という言い方になると思います。食のことであるとか、医学の問題もそうですが、一次産業に結びつくものとか、とにかく一次的なもの。最初に土から採れたもの、土に接触したものを原料、材料にして、いろんな物産をつくる。その産業がだんだんにいって、二次産業、三次産業になっていきます。日本の強みというのは、この一次、「primary」というところの根っこを保った産業や文化、感覚、ものの考え

方、これらを発達させてきたということなのではないかと思います。

日本文化とは何か。ヨーロッパの文化と比べて、何がちばん違うかというところ、自然とのリンク、つなぎの輪の部分を絶対に強く保った文化がつくられているのです。これはもう宗教、神様のことから始まって、食べ物に至るまで、全部、そのようにしてつくつてある。

ヨーロッパの神様って、山や川などの自然から離れてしまっていて、五次や六次など、けっこう高い位置にある神様なのです。でも、日本の神様は自然から離れないから、いつもリンクを保っている。それはキリスト教の神様から見ると、程度が低いと言われるのですが、程度が低くて結構なのです。この程度の低さが力なのだと思います。絶対に自然との輪を切り離さない神様ということです。

産業に関しても、自然との輪を絶対に壊させ

ない。TPPが来ようが、グローバル経済、金融資本が襲いかかってこようが、このリンクケージの部分を離さない、壊さないということが日本の、人類全体を見たときの大変な武器になると思います。

J Aはある意味で、この国の文化の根幹の部分に触れている

中沢…僕は、J Aの役割は重要だと思っています。世の中ではJ Aのことを悪く言う人がすごくいるのですが、J Aが壊れてしまったら、大変なことになりますよ。日本文明のいちばんのリンクケージの重要な部分が壊れてしまうことになる。

ただ、そのリンクを保つための働きをJ Aが明確に意識してやっているかというところ、僕ははたから見ていると、ちょっと物足りないところがあります。やはり農業協同組合ですから、もともと農業をベースにしている。農業とは何か

というところ、自然との輪を保ち続ける産業形態で、そこから成長してきた協同組合がベースになっているわけです。グローバルな流れがTPPを通して日本に入ってきて、J Aなどに攻撃を仕掛けてくることもあると思うのですが、これを放置するともものすごく危険なことになると思います。

ですから農協、J Aというのは、今の日本の中でとても重要な組織だと思うのです。その重要性はJ Aの中でも十分に認識されていないのではないかという印象を、僕はこの2、3年ほどのJ Aとのお付き合いの中で感じていました。もし、このことを強く意識するようになると、この組織はものすごく重要な組織に生まれ変わるのではないかと思うのです。

河合組合長も含め、三河地区の何人かの組合長さんとお付き合いしましたが、その組合長さんたちは、農業協同組合の原点というのを忘れ

ていないのです。実際、自分たちは土を相手にして、自然を相手にして農業をやっていますから、そのことを全然忘れていないのです。それを見ていて、この組織は土台の部分はまだ大丈夫なところがあることを実感したのです。

この「primary」、食の問題、体の問題、そういう人間のいちばん基礎的な部分をJAは担っていて、それはある意味で、この国の文化のいちばん根幹の部分に触れている組織ということなのです。なぜ、僕みたいな経歴的には畑違いの人間がJAに近いところで活動したいかというところ、この組織の役割はものすごく重大だと思っていますからです。

——経営体と運動体、

二足の草鞋を履きながら

JAはやっていかなければいけない

川井…ありがとうございます。私もまったくそのとおりだと思います。そのことから、組合という組織についてしっかりとした研究もしていかなければいけないと思いますし、もう一度、自分たちの足場のようなもの、根っここのようなところを確認しながら、組織を考えていかなければいけないと思っています。

今、農業協同組合の原点の感覚をお持ちになっている組合長の皆さんというお話が出ましたが、以前、河合組合長が音頭をとってください、三河地区の組合長の皆さんと和やかな意見交換をさせていただきました。そこで、河合組合長から、今の中沢先生のお話を受けて、何かご意見ありませんでしょうか。

河合…中沢先生がおっしゃるとおりかもしれませんが、私どものような農村部を抱える農業協同組合は、もちろん農業を守り、発展させていくということも大きなテーマですが、農村そのものの生活をどうやって維持していくか、集落機能をどうやって維持していくのか、これも本当に大きな課題になっています。

ただ、JAといえども、経営体です。ある程度、採算ベースに乗らなければ、職員に給料も払えませんし、いろいろな部分の指導事業もできないわけです。もちろん、農業は主軸ですが、地域のライフラインを守る、その意味合いからして、人口がどんどん減少するところの収益事業、事業論という事業というのは、本当に難しい局面に立たされています。

私どもの地域は県土面積の5分の1もあって広いうえに、山手のほうにはお年寄りばかりが住む集落があるわけですが、そういうところで

もガソリンスタンドや小さな商店のようなものがなければ、日常生活に必要な買い物にも行けないわけです。地域のライフラインを目線にした場合、私たちは採算が合わなくても、事業論として成り立たなくても、そうした事業種は残したい。そのような思いの中で活動を続けていきます。

山のほうの事業所は、ほとんどが赤字なのです。でも、協同組合だから、人口の多いところの利益が、そういうところの生活を支えている。税の分配と同じ理論だと私は思っています。農村部の協同組合の役割として、農業や自然を守ることは極めて大事ですが、そのようなことも兼ね備えて、経営体と運動体、二足の草鞋を履きながら、JAはやっていかなければいけないと思います。中沢先生のご指摘からすれば、生ぬるいかもしれませんが、私はそのような気持ちでさせていただきます。

——生産者と消費者が一緒になって

「生きる力」のベースを

商品化できないか

川井…少しJAグループの組織論のほうに話が向かってしまいましたが、非常に良いお話だと思います。さて、これまで、食の話、医療の話、地域での暮らしの話と伺ってきました。地域を守っていくということになりますと、当然、そこで協同組合が担う役割は非常に大きいわけです。

ただ、先ほどの皆さんのお話を伺っていて、改めて感じたことは、協同組合という組織に属す、属さないに関わらず、組合の精神や組合の思想というものを地域の人たちが持ち得るということだと思います。先ほどの「聞き書き」といったところも含めた教育の部分、人間の関係性のようなものについて、まちづくりやコミュニティ



ティの構築という視点も交えて、澁澤先生、何かひとこといただけないでしょうか。

澁澤…ずっとお話を伺っていて、私もいろいろなことに気づかせてもらいました。うちの活動に人材育成で入ってきている、長野県の地域の若い連中がいるのですが、彼らが三種の神器のように必ず関心をよせているものは、玄米食、味噌と醤油と豆腐の自給、薪の自給なのです。これが不思議と今、地域に入ってくる若者の共通項です。それにプラスして、先ほど河合組合長がおっしゃった集落にどう入るかというお話に関連しますが、要するに、そこでの人間関係ですね。

彼らにとっては、何かそれらが「生きる力」のベースのような存在になっているのですが、これを商品にできないかなと思うのです。農産物が商品ではなく、「生きる力」のベースの商品化です。もともととは、CSA（*10）といわ

れていた提携農業というのがあったでしょう。まさにあれは消費者と生産者が一緒になって一つの商品をつくり上げた例です。

そのようなたちができて、たぶん今は生産者の顔は見えるようになったのですが、消費者の顔は見えなくなりました。消費者はみんなネット購入するので、生産者は誰が買っているかもわからない。安心・安全をやたら求めているけれども、自分たちの顔を見せなくなりました。逆には消費者に、自分たちの顔を出させる。それで生産者と消費者が一緒になって本当に「生きる力」のベースとはどういうものかを考えて商品化していく。そういうことがすごく楽しいのではないかということをお話を伺っていて感じました。

(*10) Community Supported Agriculture S略

高齢者と若者、この二つの 「極」に焦点を合わせると 解決策は見えてくる

川井…ありがとうございます。もうそろそろ時間も迫ってまいりました。本当に様々な角度からお話をいただきました。地域という一つのキーワードはあるのですが、そこにJAとしての関わっている河合組合長には、食をベースにした活動をお話いただきました。また、早川先生には医療機関としてケアという分野から地域活動に取り組んでいくことについてお話をいただきました。そして、澁澤先生からは、自然エネルギーの問題からほかの活動も含めて、地域とはいかなるものかというお話がありました。もちろん共通するところはあるのですが、それを一つにまとめていくことの難しさを痛感しながら進行させていただきました。

では、最後にまとめも含めて、中沢先生から、前半の個別報告、その後のディスカッション、全体を俯瞰していただいて、何かお言葉をいただければと思います。

中沢…今日は確かに難しそうに見えるテーマなのですが、実践的に取り組んでいる方たちばかりを集めた具体的な話だったので、今の日本が抱えている問題がよく見えるようになりましたし、どちらの方向に開いていけばいいのかも、少し見えてきたような気がします。

早川先生は、今、農村部が抱えている高齢化を最大の問題として取り組んでおられます。また、澁澤先生は、農業に取り組もうとしている若い人たちがどのような考えでいるかを理解し、その考えを尊重して、伸ばして、育てていくという意思を強く持っていらつしやるのがよくわかりました。たぶん、この二つがいちばん重要ではないかと思います。

20代くらいから始まる若い世代が、今、農業、あるいは食べることに非常に深い関心を持ち、まともに考えようとしています。それはお米を育てることだけではなく、動物を殺して肉を食べることにしても、今まではわりあいそのことは意識に上らせないような社会だったのですが、若い人たちの中にはそのタブーを取り払って、人間が肉を食べるとはどのようなことなのかというところまで踏み込もうとしている人たちがいっぱい出てきています。これはたしかに意識が大きく変わりはじめているのだと思います。

それと同時に、農村部に蓄積された文化や精神の膨大な情報量があります。それを河合組合長が「社会共通資本」という言葉でお話しされました。そうしたものは、高齢者の中に蓄積されているけれども、これを若い人たちに、未来に向かってどうやってつないでいったらいいの

かという問題まで発生している。ある意味で言うところ、高齢者、若者、この二つの「極」のようものが、今の日本の農村問題の最も重要なポイントになっていることを、今日は強く感じました。

この問題に焦点を合わせて解決を図っていくと、意外と、解決策が見えてくるのかもしれないという気がしました。その意味では大変有意義な会になったと思います。

川井…中沢先生、ありがとうございます。時間になりました。このあたりでディスカッションを終了させていただきたいと思います。本日は、ご登壇いただきました中沢先生、河合組合長、早川先生、澁澤先生、そしてセミナーに参加してくださいました皆様、本当にありがとうございます。